東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

異年齢の児童と協働する活動を取り入れた小学校家庭科の授業実践：一年生との交流調理実習を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): elementary school, home economics, collaborate, Across Age Groups Activity, Cooking Practice 作成者: 西岡,里奈, 倉持,清美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173591

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　73：479－488, 2022

異年齢の児童と協働する活動を取り入れた小学校家庭科の授業実践

― 一年生との交流調理実習を通して ―

西　岡　里　奈*1・倉　持　清　美*2

教育実践創成講座

（2021年9月13日受理）

1．はじめに

小学校の子供たちにとって，幼児や高齢者など様々な世代の人々と関わる機会をもつことは，自己を見つめ，地域社会の中で他者との良好な関係を築くために重要である。しかし，近年の子供を取り巻く生活環境を見てみると，少子化や核家族化，地域との関わりの減少など他者との関わりが希薄化している。そのような中で，異年齢の人々と関わる機会を教育課程の中に設けて積極的に異年齢交流を行っていくことは，子供たちにとって異年齢の人々との関わり方を考える貴重な機会になっている。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編[1]では，「異年齢の幼児児童生徒が協働する経験が少なくなり，現実的には学校教育が児童がそうした経験をすることができる数少ない場となっている。」として，「高齢者や異年齢の子供など，地域における世代を越えた交流の機会を設けること。」と明記されている。このように，異年齢交流を行う「場」としての，学校教育の重要性が示されている。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編[2]でも社会の変化への対応として，改訂の要点に「家族・家庭生活に関する内容の充実」があげられ，少子高齢社会の進展に対応して，家族や地域の人々と，よりよく関わる力を育成するために，「A家族・家庭生活」においては，幼児又は低学年の児童，高齢者など異なる世代の人々との関わりに関する内容が新設された。家族や家庭生活など子供たちを取り巻く生活を扱っている教科として，家庭科の授業でも積極的に異年齢の人と関わる授業実践を行うことは，ますます重要になっていくと考える。

そこで，本研究では，小学校家庭科で六年生が異年齢の児童である一年生と関わり，協働する活動を取り入れた全７時間（異年齢交流2時間）の授業実践を行い，児童にとってどのような学びがあるかを明らかにすることを目的とする。

2．小学校での異年齢交流

小学校では，以前からも異年齢交流は行われており，小学校学習指導要領（平成29年告示）解説でも，「生活編」[3]「特別の教科　道徳編」[4]「総合的な学習の時間編」[5]「特別活動編」[6]で「異年齢」「異学年」について記載されている。特に，小学校では特別活動で異年齢交流が行われていることが多く，伊藤[7]は特別活動での異学年教育の意義として，社会性の涵養をあげている。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編[6]では，育成する資質･能力の例として，「学年や学級が異なる児童と共に楽しく触れ合ったり協力して活動に取り組んだりすることが大切であることを理解し，計画や運営，交流の仕方などを身に付けるようにする。」とある。また，「中心となって活動を進める高学年の児童が，リーダーとしての経験を重ねながら自分の役割を果たすなどの主体的な取組を通して，高学年の自覚や自分への自信を高められるようにする必要がある。」としており，高学年児童の特別活動での異年齢交流の目的としては，企画・運営を行い，高学年としての自覚や自分の役割を認識し，主体的に社会参画することだと考える。

一方，家庭科の学習指導要領解説[2]では，「幼児又

＊1　東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
＊2　東京学芸大学 教職大学院（184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1）

は低学年の児童や高齢者と交流することは，地域の人々とのつながりや信頼を深め，地域への親しみや愛着をもたらすなど，地域の中で共に生活するという視点から大切なことである。」「家族や地域の人々との協力などの視点から，よりよい関わりについて考え，工夫することができるようにする。」として，地域への愛着や親しみをもって，交流相手の立場になって考え，相手に合わせたよりよい関わり方を工夫して実践することが目的とされている。

小学生の乳幼児触れ合い体験から小学校家庭科での実践の可能性を検討した中谷[8]の先行研究でも，異年齢交流を行う際には，教科の目的に合っているかや，課題解決的な学習内容になっているかなどを検討していくことの重要性が指摘されている。

このように，小学校で異年齢交流は行われていても，教科・領域によって異年齢交流の目的に違いがあり，目的に合った異年齢交流を行っていくことが求められている。

３．授業実践の視点

そこで，本研究では，家庭科の目的にそって，交流相手の一年生の立場になって考え，相手に合わせたよりよい関わり方を工夫できるような授業実践を行うこととした。授業を計画するにあたっては，次の３つの視点を設定した。

第一に，一年生の気持ちを理解して交流や交流の振り返りに生かせるようにすること（視点①），第二に，一年生と関わる場面を想像してリハーサルができ，一年生との調理実習に見通しがもてるような交流活動とすること（視点②），第三に，年長者としての立場を意識して協働的に関われるようにすること（視点③）とした。

視点①から，この題材に入る最初の授業で，自分が一年生だった時の写真を見て，一年生の時を振り返り，交流する一年生に対する理解につなげる取り組みを行うこととした。また，一年生の立場に立って振り返られるように，一年生が交流後に書いた感想のカードを各グループに示した。

視点②と視点③から，交流場面はスイートポテトを作る調理実習とした。調理実習は交流場面の前に，試しに自分たちで同じ物を調理することで，六年生が手順に沿いながら，どのようなかかわり方をしたらよいのかを見通しをもって考えやすいと予測した。また，六年生はすでに学んだ「ゆでる」「いためる」調理などの安全や衛生に関する知識や技能を活用でき，年長者としての立場を保ちつつ「おいしいスイートポテトを作る」という目的を一年生と共有することで，課題解決に向けて両者で協働的な活動が行いやすいと考えた。

一年生が調理することについては，信清・佐藤[9]が低学年児からの実践可能性について検討しており，一年生でも調理学習を行うことは可能であり，家政学を基盤とする法則・理論の系統的学習として低学年から調理学習を実践していくことは意味があるとしている。本研究でも，一年生に事前指導を行ったり六年生と協働したりすることで，安全に調理を行えるように配慮して授業実践を行った。

４．授業実践の概要

４．１　授業の目標

本研究の授業実践の目標は，「六年生が自身の成長を意識し，家庭科の学びを通してできるようになった事を生かして，一年生との関わり方を工夫していく。」ことである。

４．２　授業計画

授業実践は学習指導要領の移行期間である2019年10月～11月に実施した。六年生98名(男48名，女50名）交流相手の一年生は104名(男52名，女52名)である。

異年齢交流のグループは対象校で異年齢交流の際に使用している縦割り班をもとにした，六年生2～3名，一年生2～3名の小人数グループで行った。

交流を行うグループの人数については，特別活動で行われている「縦割り班」活動などの集団での交流とペア活動などの限られた人数での交流があるが，年長児に求められる役割や効果の違いが，毛利ら[10]や服部[11]に指摘されている。毛利ら[10]は，「一対一の関係のなかで６年生が１年生に頼られ，彼らの世話をすることで身に付ける力や自信（自己有用感）は，異年齢集団のリーダーとしての経験を通して身につける力や自信と比べて，社会性のより基礎的な部分に関わっているように思う。」としている。そのため，本研究では，通常の「縦割り班」での交流ではなく，少人数のグループでの交流とした。

授業実践を行うに当たっては，一年生に事前・事後学習を家庭科教員が１時間ずつ行い，事前学習では交流学習の概要，家庭科室の紹介や食材・調理器具などについて確認し，事後学習では，交流活動後の感想や一緒に活動を行った六年生の様子を学級で共有して，カードにまとめる活動を１時間行った。

４．３　授業の内容

第1次：「一年生のころを思い出してみよう」（1時間）

視点①に基づき本次では，自分たちが一年生だった頃をふり返って思い出し，年長者として一年生に働きかけられるようにした。

始めに，縦割り班で日頃交流している一年生についてのイメージを共有した。六年生からは，「言うことを聞かない」「力が弱い」「やんちゃ」などと，否定的な発言があがった。そこで，六年生が一年生だったころの写真を全体に提示し，自分たちが一年生だったころを想起させた。その後，グループごとに６年間で変わったことを模造紙にまとめて，一年生と六年生の違いを考えた。（図１）「身長が伸びた」といった身体的変化だけでなく，「友達が増えた」「我慢強くなった」など，内面の変化にも気づいていた。

授業の中で当時の自分たちを振り返る活動を行ったことで，「自分の一年生と六年生のときの画像を比較したり，（６年間で変化したことを）あげたりしたことで，一年生は六年生に比べて未発達であることが分かりました」「一年生の頃は，何をすると嫌がるのか，人がどんな気持ちでいたかまでは分からなかったけど，今はそういうところまで考えて行動することができるようになった」と，自身の成長を実感し，授業の前には，一年生と関わることへの苦労や不安といった六年生としての立場しか考えていなかった六年生も，自分が一年生だった頃を思い出し，「一年生には分かりやすい言葉で接しなければならないと思いました」と，一年生との違いを考慮して六年生としての関わりを考える様子がみられた。

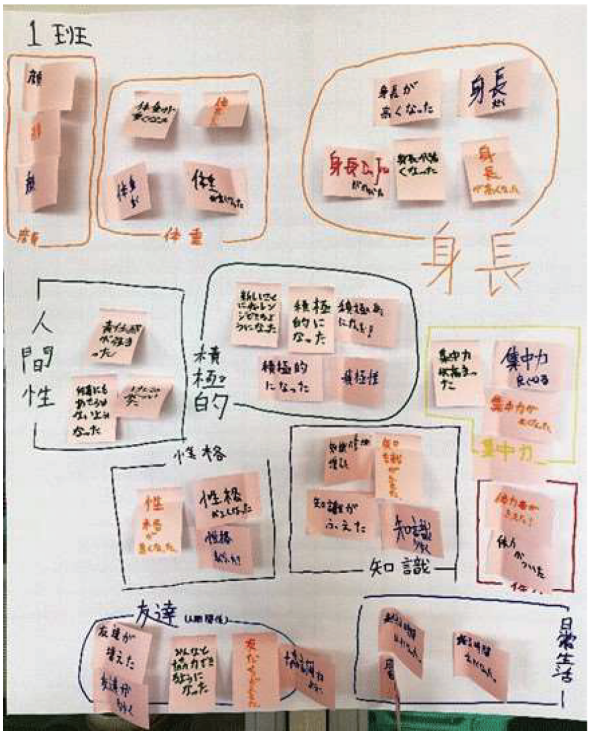

図１　一年生と六年生の違い

第2次：「スイートポテトを作ってみよう」（2時間）

本次では，視点②と視点③に基づき一年生との交流にむけて調理方法の確認と関わり方を検討するために，縦割り班ごとに六年生だけでリハーサルを行った。

実際に作ってみることで，切り方やゆで時間など調理過程を具体的にイメージできるようにし，危険な箇所や時間配分など一年生と作るとき意識したいことや気をつけることを話し合った。

第3次：「おやつタイムの準備をしよう」(１時間)

前次をふまえ本次では，視点②に基づき，関わるときに気をつける点を考える際に,「切る」「ゆでる」「つぶす」「まぜる」「丸める」「焼く」と，具体的な手順に沿って考えられるようにした。場面を調理手順ごとに分けたことで，活動場面が限定されて行動をイメージしやすくなり，その場に合った手立てや安全に行うための配慮事項をより具体的に話し合っていた。

また，視点③として年長者としての立場を意識できるように，関わり方を具体的に考えさせる際に，「六年生」「一年生」の各々の立場と「楽しんでもらうために」という項目も設定した。六年生としての自分の立場だけでなく，一年生の行動や気持ちを想像して考えることができ，「六年生が手本を見せてから，一年生にやってもらう」など，一緒に行うためにはどうし

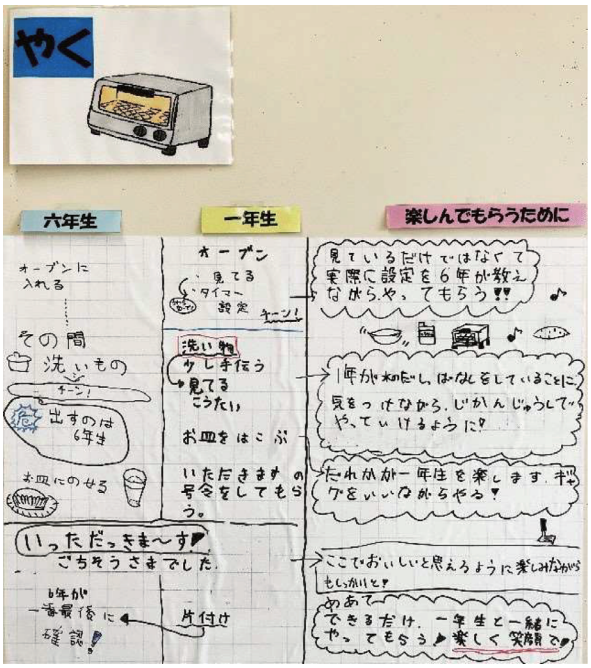

図２　調理の手順

たらよいか関わり方の工夫を考えることにつながった。また，前次に行ったスイートポテトの調理実習での経験も活用していた。（図２）

第4次：「一年生とおやつタイム（異学年交流）」(2時間)

本次では，今までの学習をふまえて，一年生と交流を行った。包丁に手をそえたり，一年生ができることを率先して導いたりと，一年生が安全で楽しくできるために，事前の学びを活用して工夫をする姿が見られた。

第5次：「おやつタイムをふり返ってみよう」(1時間)

本次では，本題材のまとめとして交流活動での一年生への関わりの振り返りを行い，一年生との交流で，「上手くいった点」と「改善点」を共有した。上手くいった点では，「待ち時間にスイートポテトの話で盛り上がった」「一年生がさつまいもが切りやすいように，半分に切ってから行った」，改善点では「一年生が作るのに時間がかかった」などがあがった。改善点にあがった内容については，同じ場面でも上手く関われた班の発表を聞き，今後の参考になるようにした。一年生への気づきでは，「ほめてあげるとやる気がでる」「思っていたよりも，いろいろなことを知っていた」など新たな発見があがった。

その後，視点①に基づき「一年生に楽しんでもらう」という目標に対し，六年生だけでなく，一年生の立場に立って振り返られるように，一年生が交流後に書いた感想のカードを各グループに示した。

カードには「六年生は力が強くて，教え方も上手だったから，とても美味しく作れました。」「最初，作るときはできるかな？と心配だったけど，六年生とやるとホッとしたよ。」「私も六年生みたいになりたいなと思いました。」など記述が多くあった。そこから，一年生が六年生のことをどう思ったかを共有した。六年生が上手くいかなかったと感じたことでも，一年生のカードから喜んでくれたり，六年生のことを「すごい」と感じたりして，一年生にとって憧れの存在であることを理解した様子だった。

５．六年生の学び

５．１　分析方法

授業実践の六年生の学びを検討するために，第５次に六年生96名が記入した授業実践を通してのワークシート(感想文)の記述について，KH-Coderを用いて計量テキスト分析を行った。

分析の前処理として，同じ意味で用いられているが表記が異なる用語（１年生，一年生，１ねんせいなど）や平仮名とカタカナが混在する用語（さつまいも，サツマイモなど）は統一して分析を行った。児童の固有名詞は，文脈に合わせて，「六年生」「一年生」とした。

５．２　分析結果と考察

六年生の記述した文章から抽出された総抽出語数は7,463語で，異なり語数は752語であった。抽出語の

表１　抽出語（上位40語）

	抽出語	出現回数
1	一年生	238
2	思う	144
3	六年生	65
4	交流	55
5	分かる	41
6	嬉しい	33
7	自分	31
8	良い	28
9	今回	26
10	楽しい	24
11	書く	20
12	カード	19
13	少し	18
14	見る	17
15	言う	16
16	考える	16
17	関わる	14
18	気持ち	14
19	素直	14
20	感じる	13
21	今	13
22	スイートポテト	12
23	生かす	12
24	接す	12
25	楽しむ	11
26	嫌	11
27	縦割り班	11
28	人	11
29	知る	11
30	聞く	11
31	教える	10
32	作る	10
33	名前	10
34	優しい	10
35	イメージ	9
36	最初	9
37	授業	9
38	子	8
39	上手い	8
40	仲良く	8

上位40語は，表１の通りである。「一年生」(238)「思う」(144)「六年生」(65)「交流」(55)が50回以上出現し，感情を表す形容詞としては，「嬉しい」(33)「良い」(28)「楽しい」(24)があった。

５．２．１　共起ネットワーク

探索的に「感想」の内容を把握するために，共起ネットワークによる分析を行った。図３は，出現回数が8回以上である上位40語で係数が0,2以上の共起関係を示した共起ネットワークである。6つのグループが作成された。01は「一年生」「六年生」「思う」「わかる」「良い」などからなり，一年生との交流がポジティブに受け取られている様子がわかる。02は，「聞く」「最初」「イメージ」などからなり，交流する前の「最初」には，一年生に対して言うことを聞かないイメージがあった様子がわかる。03は「縦割り班」「生かす」からなり，今後の縦割り班の活動に経験を生かしていこうとする様子が伺える。04は「気持ち」「考える」「人」からなり，交流を通して他者の気持ちを考えるようになった様子がわかる。05は，「嬉しい」「カード」「見る」「書く」「素直」などからなり，一年生が書いたカードを見てうれしく思っている様子がわかる。06は，「スイートポテト」「作る」からなり，スイートポテトを作るという行為自体が印象深かった様子が伺える。

全体的に交流を肯定的に受け止めている感想が読み取れた。

５．２．２ クラスター分析

クラスター分析（Ward 法）を行い，感想の分類を行った。クラスター数を決める際，クラスター併合の段階を示す「併合水準」を参考にし，8つのクラスターに分類した。（図４）

「1.一年生のカード」と関連がある感想は，『カードを見ることによって，一年生が思っていることを，いろいろと知ることができて，とても嬉しい気持ちになることができました。』，『一年生がどんなことを思っているのかを，カードを見て分かりました。なので，そこに，楽しかったと書いてくれていたのを見ると，嬉しかったです。』などであった。一年生が書いたカードから一年生の気持ちを知って嬉しく感じたり，一年生への理解が深まったりしたことが分かった。視点①から第５次に一年生のカードを共有する活動を取り入れたが，一年生が交流活動をどのように捉えていたかを六年生が知ることができ，一年生への理解に大きな役割を果たしたと考える。

「2.一年生への気づき」では『この授業で一年生のいろいろなことを学びました。素直な所や弱い所などがあることを知りました。』『「〇〇やって。」と頼むと「うん，いいよ。」と素直に頼まれたことをやってくれて，思ったより手がかからなくて，楽でした。』などと書かれていた。視点③から，六年生が教えられる活動を取り入れたが，一年生の別の側面の理解を促すことにつながったと考える。

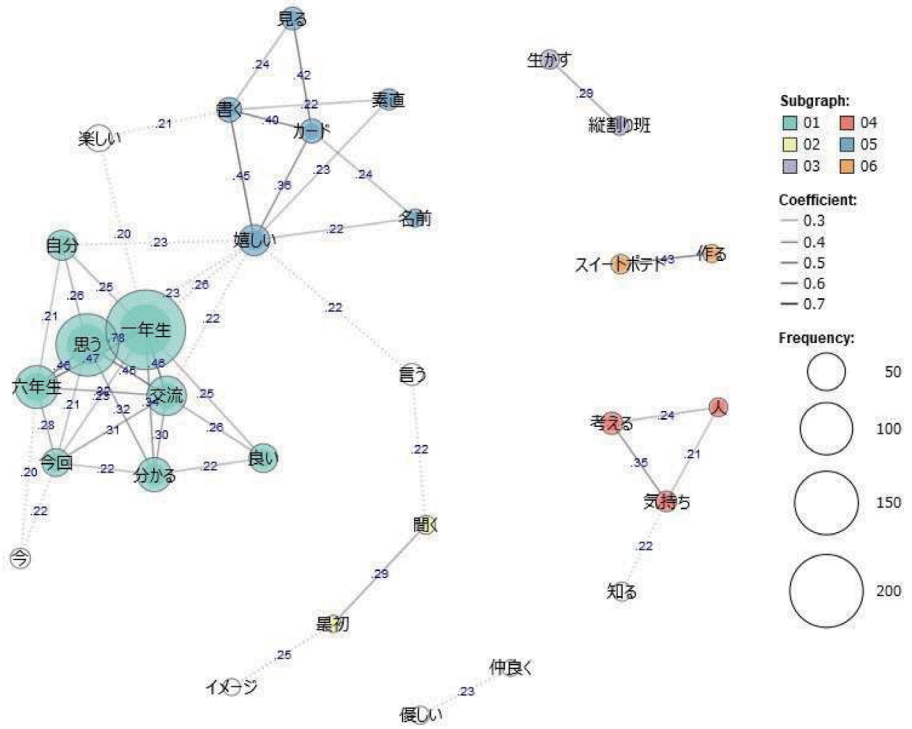

図３　感想の共起ネットワーク

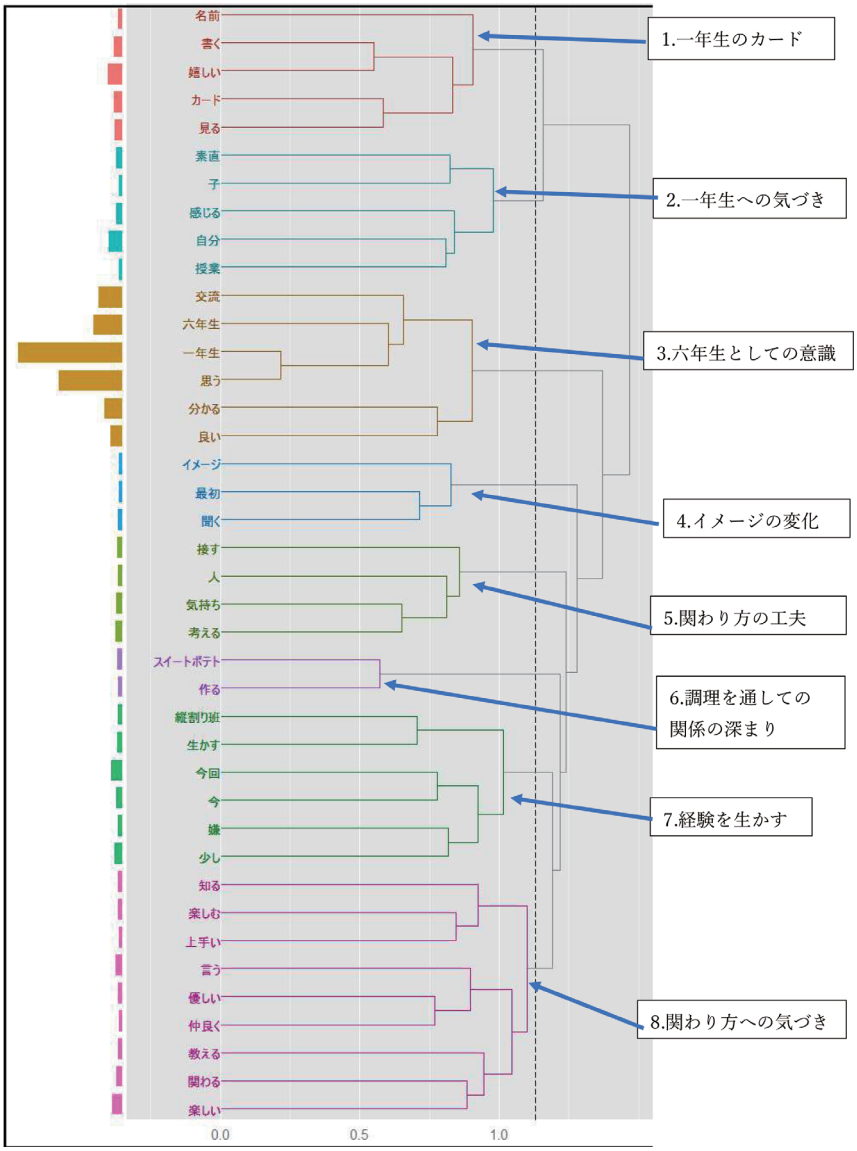

図４　感想のクラスター分析

「3.六年生としての意識」では『一年生は，六年生のようになりたいと思ってくれているので，六年生は一年生のお手本の様に優しく接し，かわいがってあげるべきだと思いました。』『今回の交流を通して，一年生もすごくできることが沢山あって，もっとそれを良くしたいと思っている，という事が分かりました。だから。もっと良い六年生にならなければならないし，一年生の気持ちをもっと細かく考え，その時にどの様な行動をとる必要がある事に気が付きました。』と書かれていた。スイートポテトを一緒に作る「交流」で，一緒に作業をすることを通して，六年生としての自分自身についても考えられている様子だった。視点②では，手順に沿って一年生のことを考えながら気を付ける点を整理したが，そのことを活かして振り返り，今後への意欲を持っている様子が伺える。

「4.イメージの変化」では，『最初は，一年生は無邪気で，言うことを聞いてくれないというイメージが強かったけれど，交流をしてみて，意外と素直に進んで作業をしてくれて，嬉しかった。』『1年生のイメージは，最初，嫌なイメージしかなかったけれど，交流をし，振り返ってみて，真面目なところやしっかりしているところもあるということが，分かりました。』と記述されていた。一年生に対して，関わりづらい「最初」の「イメージ」から肯定的な印象に変化がみられたことが分かった。視点③を取り入れた交流で，長時間にわたり一年生と関わったことで，一年生の新たな一面に気づいたり，交流でよい関わり方が実践できたりしたからだと考える。

「5.関わり方の工夫」では，『交流をしたことで，少しは一年生の気持ちが理解できたのかなと思った。縦割り班で昼食を食べるときも，一年生と接することで考えた接し方も頑張って実行しようと思った。』『一年

生と交流したりするときに，ここまで深く考えることは，あまりしなかったので，良い機会だった。年下の人からの気持ちや目線が分かった』『一年生といる時は，自分たち目線で考えることはダメだと，改めて思いました。これから，一年生と関わるときは，相手の立場も考えたいです。』とあり，一年生の気持ちや発達段階を考えて関わったことや，六年生としてのどのように関わっていくことがよいかについて言及していた。記述からは，交流から学んだ一年生と関わり方の工夫を振り返っていることがうかがえる。今回の授業実践では，視点②から，事前に六年生だけで調理実習を行い，調理手順だけでなく具体的な一年生との関わり方を予測して考えることを行っていたので，交流中も一年生へのより良い接し方を意識して関わることができたのだろう。

「6.調理を通しての関係の深まり」では，『一年生と，スイートポテトを一緒に作ったことによって，一年生との交流が深まったので，とても良かったと思います。』『スイートポテトを作り食べ終えた時の一年生の顔と，感想を聞き，やり甲斐があったなと思いました。』などの記述があり，一年生との交流を肯定的に捉え，一年生とより関係を築けたことが読み取れた。これは，視点③で交流内容を協働する活動にしたことで，六年生が一方的に一年生に関わるのではなく，一年生と目標を共にし，協力して調理実習を行ったことへの達成感と喜びがあったのからはないかと考える。

「7.経験を生かす」では，『縦割り班遊びなどがまだまだあるので，今回学んだことや分かったことを，一年生に限らず，生かして，より良いものにしたい。』『一年生は六年生のことが嫌なのか，不安だったのですが，今回の交流で，その不安は無くなりました。自分よりも小さい子と関わるのは，これからもあると思うので，今回の交流会を生かしていきたいです。』などと書かれていた。このように，今後の関わりについての記述がみられ，六年生が年長児としての自覚を高め，一年生と関わることに対しても意欲的になったことがうかがえる。これは，視点①で一年生への理解を促したり，六年生自身の成長を自覚させたりしたことが，この結果につながったのではないかと考える。

最後に，「8.関わり方への気づき」では，『一年生楽しめたのかなと思ったのですが，一年生的には，楽しいと思ってくれていて，面白かったです。』『思っていたより楽しくて，一年生と話すことも，楽しく感じることができました。』などの記述があり，カードや一年生との会話から一年生が楽しめたことを確認し，六年生も楽しかった様子がうかがえる。また，『今回の交流では，たくさん褒めました。そして，「カード」に「優しく教えてもらって，嬉しかった」と書いてあって，すごく嬉しかったです。』『例えば，年下の子をしっかり面倒を見ることや分かりやすいように教えてあげることなど一年生と，スイートポテトを一緒に作ったことによって，一年生との交流が深まった』『自分が思っていたよりも，一年生が上手くできていることを知って，すごいなと思いました。』『一年生がもっと仲良くしたい気持ちがあること，頼れる存在であることが分かりました。また，交流のときに，スイートポテト以外の会話が，あまりありませんでした。だから，もっと一年生と関わって，仲良くなって，一年生について，もう少し知りたいなと思いました。』などの記述がみられた。視点①で取り入れたカードから，視点②で取り入れた事前の教え方の工夫を考えたことが役に立ったという実感が持てているようだ。その経験を今後に活かそうとする様子がうかがえる。

以上から，３つの視点を取り入れた授業が，一年生を理解することにつながり，交流で得られたかかわり方への気づきを次回に活かそうとする態度が，感想から読み取れた。

６．本研究のまとめと今後の課題

本研究では，小学校家庭科での異年齢交流の目的にそって，交流相手の一年生の立場になって考え，相手に合わせたよりよい関わり方を工夫できるように，「六年生が自身の成長を意識し，家庭科の学びを通してできるようになった事を活かして，一年生との関わり方を工夫していく。」ことを目標として授業実践を行った。

その結果，六年生が記述したワークシートからは，①一年生のことを理解して，肯定的なイメージへ変化したこと(「1.1年生のカード」「2.1年生への気づき」「4.イメージの変化」)，②一年生の立場に立って考えて，よりよい関わり方を工夫したこと(「5.関わり方の工夫」「6.調理を通しての関係の深まり」「8.関わり方への気づき」)，③年長児として意識が高まり，一年生と関わることに意欲的になったこと(「3.六年生としての意識」「7.経験を活かす」)が明らかになった。

このような学びが生まれた理由としては，交流活動の時間だけでなく事前・事後の授業を重視して，具体的に関わり方の工夫を考え，交流後の振り返りも充実させたからだと考える。特別活動での異年齢交流実践を研究した服部[9]の先行研究でも，「感想を交流する機会を設けたことで，関わりへの自信を高めるととも

に，自分の人への関わり方を振り返る児童が増えた。」とあり，異年齢交流の場を設定するだけで年少児への関わり方を工夫することにつながるわけではなく，交流を行って振り返りの時間を充実させることも重要だといえる。その意味で視点①(一年生の気持ちを理解し交流や交流の振り返りに活かす)を取り入れた授業は効果的であったといえる。しかし，特別活動などで行われている異年齢交流では，十分な時間の確保が難しいことが毛利[12)]によって指摘されている。そのため，小学校家庭科で異なる世代の人との関わり方を学ぶ機会を確保し，学習を行っていくことは，今後，さらに重要性を増していくだろう。

また，今後の課題として，本研究では，授業実践での児童の学びをワークシートから検討したが，実際の交流で六年生がどのように一年生と交流していたかは，明らかになっていない。今後は，交流中の六年生の行動も合わせて検討してくことが必要だと考える。

そして，様々な学校教育の場で異年齢交流が行われている中で，交流の機会を作るだけではなく，目的やねらいをしっかり認識したうえで行っていくことが重要である。しかし，授業時数には限りがあるため，異年齢交流を実施するためには，家庭科の中だけで異年齢交流を行うだけではなく，領域横断的な学習計画を考えたり，他教科・領域等との関連も図りながら教科横断的に行ったりすることも検討していく必要がある。

引用文献

1）文部科学省：小学校学習指導要（平成二十九年告示）領解説 総則編，89・125，東洋館出版社, 2018

2）文部科学省：小学校学習指導要（平成二十九年告 示）領解説 家庭編，9・26-29，東洋館出版社, 2018

3）文部科学省：小学校学習指導要（平成二十九年告 示）領解説 生活編，69，東洋館出版社, 2018

4）文部科学省：小学校学習指導要（平成二十九年告示）領解説 特別の教科　道徳編，廣済堂あかつき, 2018

5）文部科学省：小学校学習指導要（平成二十九年告 示）領解説 総合的な学習の時間編，東洋館出版社, 2018

6）文部科学省：小学校学習指導要（平成二十九年告 示）領解説 特別活動編，84-89,東洋館出版社, 2018

7）伊藤崇：日本の異学年教育と香川大学教育学部附属高松小学校の「縦割り創造活動」，子ども発達臨床研究，12,49-54,2019

8）中谷 奈津子：乳幼児触れ合い体験における小学生の学びと変容：小学校家庭科における「家族や地域の人々との関わり」を視野に入れて，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，12(1), 21-29,2018

9）信清亜希子・佐藤園：小学校低学年からの家庭科学習の実践可能性の検討―小学校第１学年における調理実習「なぜ，調理をするのか？」の実践と評価を通してー，日本教科教育学会誌，42(1)，1-12,2019

10）毛利 猛・北村 正巳・髙田 信也：小学校における「異年齢集団による交流」の現状：兵庫県・中西播地域での調査を手がかりに，香川大学教育実践総合研究，28, 129-136,2014

11）服部易弘：小規模校における望ましい異年齢の交流活動の在り方 ―縦割り活動とペア活動の特徴に着目して―，愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集 (5), 271-280,2014

12）毛利猛：小学校における「縦割り班」活動の現状と課題，香川大学教育実践総合研究，8, 23-35, 2004

異年齢の児童と協働する活動を取り入れた小学校家庭科の授業実践

― 一年生との交流調理実習を通して ―

The Practice of Across Age Groups Activity in Elementary School Home Economics Class:

Through Exchange Cooking Practice with 1st Graders

西　岡　里　奈・倉　持　清　美

NISHIOKA Rina＊1 and KURAMOCHI Kiyomi＊2

教育実践創成講座

Abstract

For children who have less opportunity to interact with people of different ages in their daily lives, it is important to have the opportunity to engage with people of different ages in elementary school education. In this study, we conducted classes of across age groups activity by 1st and 6th graders in elementary school home economics. The total number of classes is 7 hours (the activity is 2 hours). The activity contained the class of cooking sweet potato cakes with the 1st graders.

The research subjects were 98 6th graders. The reports that the 6th grader wrote at the end of the class practice were analyzed by applying text mining.

As a result of the analysis, it was clarified from the reports described by 6th grader that (1) They understood the 1st grader and changed to a positive image (2) They devised a better way of involving from the standpoint of 1st graders and thinking about how to get involved (3) They became more aware as older children and became more active in their involvement with 1st graders.

Through the activity with the 1st grader, the 6th grader deepened the understanding to the 1st graders and was able to have a good related. And, by building better relationships with 1st grader, they were motivated to engage with 1st graders outside home economics classes.

Keywords: elementary school, home economics, collaborate, Across Age Groups Activity, Cooking Practice

Advanced Studies on Training Educational Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

＊1　The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
＊2　Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)

要　旨

日々の生活の中で異年齢の人と関わることが減少している子供たちにとって，小学校教育の中で異なる年代の人々と関わる機会をもつことは重要である。そこで，本研究では，小学校家庭科で六年生が異年齢の児童である一年生と関わり，協働する活動を取り入れた全７時間（異年齢交流2時間）の授業実践を行い，六年生にとってどのような学びがあるかを明らかにすることを目的とする。交流内容は，六年生が一年生と協働して活動できるように，一緒にスイートポテトを作る調理実習場面とした。

研究対象は，小学校六年生98名（男子48名，女子50名）。分析方法は，六年生が授業実践の最後に記述したワークシートについて計量テキスト分析を行った。

分析の結果，六年生が記述したワークシートからは，①一年生のことを理解して，肯定的なイメージへ変化したこと，②一年生の立場に立って考えて，よりよい関わり方を工夫したこと，③年長児として意識が高まり，一年生と関わることに意欲的になったことが明らかになった。六年生は一年生との交流を通して，一年生への理解を深めて関わり方を工夫することができた。また，一年生とよりよい関係を築けたことで，家庭科の授業以外でも一年生と関わることへ意欲を高めていた。

キーワード：小学校，家庭科，協働，異年齢交流，調理実習